

昭和 15 年 12 月下旬の淺間山火山活動

輕井澤 觀測所

1. 12 月下旬の火山活動

昭和 15 年 11 月中旬から引續き、12 月には淺間山は非常に活氣を呈し、しばしば無音の爆發をした。特に 3 日、19 日、21 日及び 25 日の爆發は爆音を伴ひ、このうち 21 日が最大のやうであつた。

12 月 21 日 3 時 17 分頃、「ドーン」といふ爆音があり、續いて戸障子が鳴る程度の空氣振動があつた。このため山麓の人々はめざました。「ゴウゴウ」といふ鳴動は 25 分間聞え、積雪中に噴石が落下する音が聞えた。前日から雲霧が深く、時々微雪があり、詳細は不明であつたが、噴煙は SE に流れたらしく、15 分後には、當所に約 14 分間降灰砂があつた。この積灰砂量は坪當り約 28.0 瓦あつた。この活動は中程度の爆發であつた。

12 月下旬には、この他に 22 日、24 日、25 日及び 31 日に爆發があつた。

12 月 24 日 16 時 39 分の爆發（寫眞 5 参照）は、無音で黒煙があがり、被害がない程度の降灰があり、17 時 10 分まで續いた。

12 月 25 日 20 時 34 分頃の爆發は、「ドーン」といふ爆音を伴ひ、開いてゐた風呂場の扉が強く閉ぢる程度の空氣振動があり、黒煙を噴出した。

12 月 31 日 13 時 09 分の爆發（寫眞 6 参照）は、無音中程度で、多量の黒灰色煙があがつた。

この噴煙は、48 分後には灰色に變り、16 時 03 分には全く白煙になつて平常状態になつた。高度は約 1,500 米で、離山北側を通過して碓氷峠に達した。降灰は平地にない見込みである。

2. 踏 査 概 況

12 月 22 日、調査のため登山した。その途中、星野温泉手前では、積雪中に微量の降灰があつたが、千ヶ瀧方面では異常はなかつた。この時、9 時 52 分

突然無音の爆發があつた(寫眞 2 参照)、

この活動時には、噴煙は南東に高度約 1,500 米、毎秒 8.9 米の速度で碓氷峠の方に流れた。爆發 13 分後には、4 分間微量の降灰があり、積雪面が薄黒くなつた。峰の茶屋附近ではこの降灰も前日の灰跡もなく、積雪は純白であつた。

この方面の觀測によれば、降灰は噴煙が通過した下の幅約 3 軒の山地に限られ、平地ではなかつたやうである。

小淺間附近では、火口方面から頻りに鳴動が聞えてきた。その鳴動は 4 軒附近に重爆撃機が飛來するやうな音であつた。噴煙は約 2 分おきにあがり、褐色をおびた白煙が小塊となつてポツとたちのぼつてはすぐ消え(寫眞 3 参照)、山麓ではよほど注意しないと、みえない程度であつた。

第三烏居にのぼる際、13 時 13 分再び無音の爆發に出會ひ、灰を被つた(寫眞 4 参照)。この爆發前には、重爆撃機のやうな鳴動が聞えてゐたが、爆發直前にはこの鳴動が「ピツタリ」とやんだ。この爆發 7 分後に降灰が始まり、それから 1 分後には降灰は並雨程度の音をたて、落下した。噴煙の先端が小淺間附近に至る頃、降灰はやみ、噴煙量も減り、16 分後には全く元のやうに褐色をおびた白煙がとぎれとぎれにのぼる程度になつた。噴煙が火口上 200~300 米まで昇騰する際には、橋上を小型タンクが通るやうな鳴動が連続的に起り、黒褐色の噴煙が左廻りの螺旋狀に 3 個旋廻して(爆發見取圖参照)、その後南東に

爆發見取圖
C.B.A. 左に旋廻する
(昭和 15 年 12 月 22 日)



靡いた。當時山頂では、北寄り 5~6 米/秒の風が吹いてゐたやうであるが、噴煙先端が頭上 2 軒も越えた頃、突然吹降しの強風がしばらく襲うてきて、間もなくやんだ。この附近の積雪は約 2 米あり、降灰のためゴマ白程度になり、8 合目附近以上は昨日の爆發で全部融解してゐた(寫眞 1 参照)。熔岩の噴出も多少あ

つたらしい。歸路、14 時 23 分、15 時 13 分、15 時 22 分、15 時 57 分及び 16 時 08 分に小爆發がおこり、下山後、19 時 28 分にもおこり、合計 8 回に達した。